輝く 恵那人

220人目

武並町竹折中切
中島（なかしま）　晴美（はるみ）さん（72歳）

□プロフィル

愛知教育大学教授を経て、現在は多治見市陶磁器意匠研究所所長を務める。活躍は日本にとどまらず、オランダやフランス、アメリカなどでも作品が展示されている。市内では、恵那文化センターと武並振興事務所で鑑賞することができる。仕事の合間に車を走らせ、日本アルプスを眺め癒やされている。

▲作品と正面からぶつかる

自分に正直な作品を作る

第11回円空賞を受賞

江戸時代前期に美濃国に生まれ、生涯に12万体の神仏像を彫ったという修行僧、円空。その円空を連想させるような活躍をしている現代作家を顕彰する円空大賞で、陶芸家の中島晴美さんが円空賞に選ばれた。

うねり、ねじれた球体の上に、無数の青色や銀色の水玉模様が散りばめられている中島さんの作品は、国際的にも高く評価されている。作品を作る時「焼き物の魅力とは何だろう」と、土と対話する。「批判も自分にとっては褒め言葉。一番つらいのは、良くも悪くも人の心に響かないこと」と話す。心揺さぶる作品を作りたいと、50年以上にわたって土に触れてきた。

幼い頃から美術が得意だった中島さん。大阪芸術大学デザイン科に進学し、陶芸を専攻。在学中に陶芸家の道に進むことを決めた。卒業後、滋賀県の信楽焼（しがらきやき）の製陶会社に就職したが、制約の多い陶磁器のデザインを続けるうちに、自分の心を自由に表現すべきではないかと悩むようになった。そんな時、信楽焼のデザイン指導をしていた熊倉順吉（じゅんきち）氏と出会った。「陶芸を続けるなら多治見市陶磁器意匠研究所に就職し、周囲にこびず、自分の好きなものを作れ」という言葉が、中島さんの背中を押した。

帰郷すると、昼間は仕事をして、帰宅後は制作活動に没頭した。研究所では、文化施設やビルなどを飾るタイル壁画のデザインをいくつか任された。恵那文化センターのホワイエにある巨大な壁画もその一つだ。仕事としても、心を表現する場を得ることができた。

現在は、後進の育成にも力を入れている。指導をしていると、「作ることは生きることだ」と改めて感じる。20代には20代の良さ、70代には70代の良さがあり「今の自分にしか作れない、正直な作品を作っていきたい」と話す中島さん。今日も土と対話をしながら正面からぶつかっている。

News & Topics まちのわだい

その他の話題もウェブサイトに満載

1/14 SDGsの理解を深める講演会を開催

俳優で気象予報士の石原良純さんを招き、SDGs講演会が開催されました。石原さんは、天気をキーワードにSDGsを解説。ユーモアあふれる講演に会場は笑いに包まれました。地元企業や恵那農業高等学校による活動発表や、意見交換もあり、有意義な時間を過ごしました。

1/15 うまく滑れるようになったよ 笑顔あふれるスケート教室

プロフィギュアスケーターの村上佳菜子さんによるスケート教室が開催されました。村上さんは、滑る時の上手なバランスの取り方などのこつを指導しました。長島小学校4年生の渡辺琴心（ことみ）さんは「フィギュアスケートをやってみたいなと思いました」と笑顔で話しました。

1/17 市内選手で初、スピードスケートで世界に挑戦

市体育連盟所属でスピードスケート選手の遠藤二千翔（にちか）選手が、1月12日から22日にかけ米国で開催された大学生による世界大会に、日本代表として出場しました。2月2日には、青森県で行われた八戸国体にも出場し、成年男子5000㍍で見事優勝を果たしました。

1/28 古い町並みを守るために 火災予防を呼びかける

重要伝統的建造物群保存地区の岩村町本通りで、市少年消防隊岩村地区の隊員らが、3年ぶりに「こども夜回り」を行いました。雪の残る寒空の中、拍子木を打ち鳴らし「岩村町を火災から守りましょう」「出かける前に火の元を確認しましょう」と火の用心を呼びかけました。

2/2 地域の伝統文化を受け継ぐ 武並小で「道笛」学習

ふるさと学習の一環として、武並小学校6年生が道笛（みちぶえ）の練習をしました。児童らは笛を手作りするところから始め、昨年から練習を重ねてきました。練習の成果は、「武並町文化発表会・武並小学校学習発表会」で地域の人たちに披露されました。

2/13 かんぽの宿恵那は、新ホテル「ゆずり葉」で4月スタート

臨時市議会で、日本郵政から本市が土地と建物を取得し、地域資本の新会社、恵那峡リンクス㈱に売却する議案が可決されました。

かんぽの宿は「ゆずり葉」として㈱女将塾が運営。「恵那峡で過ごす豊かな滞在」をコンセプトに、4月18日にグランドオープンします。